

# 文学館だより

令和 6年12月 1日  
若山牧水記念文学館  
TEL 0982-68-9511  
文責 日高 第104号

この前まで「暑い、暑い」と言っていたように思いますが、秋はあっという間に過ぎ去り、一気に寒気到来。いつもの師走を迎えました。今年は皆の平穏を祈り続ける一年でした。自然災害、戦乱の世の中が多く詠まれた一年でした。

## 第3回伊藤一彦短歌実作講座開催 11月20日(水)

館長伊藤一彦先生を日向にお迎えして本年度最後の短歌実作講座を開催しました。「開講当初に比べみんな上手になってきた。ことばの順番とか表現の工夫とかを伝えていく」と伊藤先生に言っていたいただき、意見感想を交えながら学びを高めました。今回の投稿歌と添削後を紹介します。

○能登地震加えて豪雨襲いけり立ち上がる意気つぶすがごとく  
↓  
地震の能登加えて豪雨襲いけり立ち上がる意気つぶすがごとく

○子も知らぬ悲しみもありしが晩年の今が幸せと母言ひくれにけり  
↓  
子の知らぬ悲しみもありしが晩年の今が幸せと母言ひくれり  
子も知らぬ悲しみのありしが晩年の今が幸せと母言ひくれり

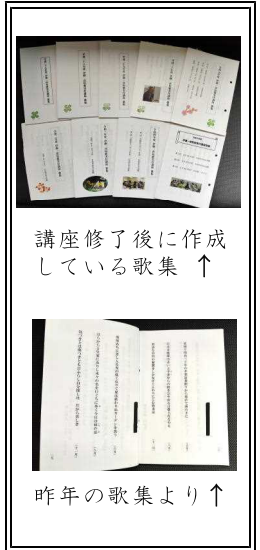
- ① 「も」の重なり・・・どちらかを「の」にするとよい。
- ② 結句9音を7字に収める。

○きよきよと深秋の朝相思鳥姿は見えねど交わす声あり  
↓  
きよきよと深秋の朝相思鳥姿見えねど交わす声あり

- 4音・4音の字余り・・・3音・4音(4音・3音)にするとよい。

○五つ六つひょうたんカボチャの柿の木に“空飛ぶカボチャ”と皆が笑顔に  
↓  
五つ六つひょうたんカボチャ柿の木に“空飛ぶカボチャ”と皆が笑えり

- ① 小さい「ゃ」「ゅ」「ょ」(拗音)は1音に数えない・・・「ひょ」「う」「た」「ん」は4音
- ② 結句の言いきし「笑顔に」(名詞+)を「笑えり」(動詞)に変える。



今年度も歌集にまとめ、講座生に届けます。

## 坪谷小のみんな、牧水生家清掃ありがとう 11月28日(木)

今年も、牧水の母校坪谷小学校のみなさんが牧水生家を清掃してくださいました。下級生とペアを組む上級生の姿、先生と並んで草を抜く姿、みんなの一生懸命な姿を今年も見ることができました。坪谷小のみんな、ありがとうございます。



初めて参加した1年生



終了後、尾鈴山に向かって牧水短歌斉唱



宮崎日日新聞社が坪小密着取材。1月の宮日こども新聞をお楽しみに。



# 発表！！ 第29回若山牧水賞

  <p>おおつじ たかひろ 大辻 隆弘 さん</p> <p>つるばみ 受賞歌集『 椽 と 石垣 』</p>	  <p>たかやま くにお 高山 邦男 さん</p> <p>マザー 受賞歌集『 Mother 』</p>
--	---

第 29 回若山牧水賞が発表され、5 年ぶりに二人の受賞者が選出されました。

大辻隆弘さん 受賞歌集『椽と石垣』より  
**あれはいつの試験監督しんしんと枇杷の木に降る雪を見てみつ**  
**鈍よりも濃き 椽 のいろの夜がわが窓のかたはらにおぼめく**

高山邦男さん 受賞歌集『Mother』より  
**母と歌ふきらきら星は途中まで買ひ物帰りの冬のゆふぐれ**  
**朝早く起き始める日はいい調子母ががらがら雨戸をあける**

授賞式及び受賞祝賀会	令和7年1月30日(木) 15:00～	ザ・メイピア宮崎(宮崎市)
受賞者学校訪問	1月31日(金) 午前	宮崎県立日向工業高等学校
若山牧水生家・若山牧水記念文学館訪問		
受賞記念講演会	1月31日(金) 午後	カルチャープラザのべおか

問い合わせ先 若山牧水賞運営委員会事務局 TEL 0985 - 26 - 7099

当文学館ではお二人の来訪に併せ令和7年1月28日(火)より企画展「第29回若山牧水賞」を開催します。今回受賞のお二人をはじめ、歴代受賞者全員の写真パネル、受賞歌集、自選五首直筆原稿、来館記念サイン色紙を一挙公開する当館ならではの企画展です。大辻さん高山さんお二人に喜んでいただけるよう準備してまいります。

## ほっこりのおすそわけ

11月生家ノートより  
 「静岡県沼津市から車で訪問。沼津の牧水記念館が地元です。遠い宮崎との縁を感じました。皆に伝えます。あと、沼津よりも規模が大きく、公園まであっていい場所と思いました。帰ったら再度、沼津の記念館に行きたいと思います。」

## 牧水先生の一首

折に触れて出会う一首を紹介しています

かん

**鉄瓶を二つ炉に置き心やすしひとつお茶の湯ひとつ爛の湯**  
 てつびんを ふたつろにおき ころやすし ひとつおちゃのゆ ひとつかんのゆ

大正 15 年詠。随筆に「炉のそばでこの文章を書いてをる。午前四時四十五分である。これを書き終へればこの白い湯気をふいてをる鉄瓶に一本つけて、たきたての飯をたべて、また一ねむりするのである。」という一節がある。鉄瓶二つ、爛の湯ひとつが何とも牧水先生らしい。